

逆行照応の句構造

時崎 久夫

0. はじめに

英語には人称代名詞が後続する名詞を指示する、いわゆる逆行照応 (backward anaphora) の現象がある。この小論では、特にこれまで統語的な観点だけでは説明できないとされてきた例について考察する。

第1節ではこれまでの研究で扱われてきた例を意味的な観点から整理して検討する。第2節ではこれらの例を句構造によって説明する方法について述べる。*

1. 逆行照応が可能になる場合

ここでは2つの節の相対的な意味の重さと、2つの節のつながりという2つの点からこれまでに研究されてきた例を整理してみたい。

1.1 2つの節の意味の相対的な重さ

1.1.1 等位節の場合

まず意味の重さから説明される例を見ることにする。普通2つの節が等位接続された場合、それぞれの節に含まれる名詞句間では逆行照応は不可能である。¹

(1) *?She_i entered the room and Rosa_j collapsed.

(Reinhart 1983:54)

しかし次の例では可能となる。

(2) a. I haven't seen him_i yet but John_i is back.

(Mittwoch 1983: 131)

b. He_j hasn't contacted me, but I'm sure

John_j is back. (Reinhart 1983: 55)

(2)の文はそれぞれ2つの等位節が but で結ばれ、1番目の節に否定の not (n't) を含んでいる。文の意味を考えてみると、これらの文は「証拠はないが、ジョンは戻っている（と思う）」という話者の判断を述べている。この点で、2つの節は統語的には等位であるが、意味的には等位でなく、2番目の節の方が1番目の節より優位にあると言える。このことは次のようなテストで示すことができる(cf. Erteschik-Shir 1973)。

(3) A: I haven't seen him_i yet but John_i is back.

(=2a)

B: a. ?Haven't you?

b. Is he?

ここで、Aの発言に対するBの返答としてaはAの1番目の節の部分、bは2番目の節の部分それぞれ確認しようとしたものであるが、bの方がaよりも自然である。一般に聞き手が確認するのは話し手の発言の中心、主張の部分であると考えられるので、(2a)の文では1番目の節が意味的には2番目の節に従属していると言えよう。よって意味的に優位、言い換えれば意味的に主節になっている2番目の節では完全な形の名詞Johnが、意味的に従属節である1番目の節では代名詞himが用いられて

いることになる。この意味的な従属節から主節への流れによって代名詞から先行詞へという逆行照応が可能になっていると考えられる。

上の(2)は接続詞butの意味から意味的な主従関係が生じた例であったが、接続詞がandでも同様の現象が生じる場合がある。

(4) a. *Mary hugged him_i, and Nancy kissed

John_i.

b. Mary hugged him_i, and Nancy kissed

John_i. (McCray 1980:335)

普通の場合、(4a)のように逆行照応は許されないが、(4b)のように2番目の節の動詞に文強勢が置かれれば許される。McCray (1980)は(4b)を2番目の節に意味的な頂点(semantic peak)があるために逆行照応が可能になっていると述べているが、これは文強勢によって2番目の節が意味的な主節となり、それに伴って相対的に1番目の節が意味的な従属節になっているということもできよう。

1.1.2 主節と従属節の意味的な逆転

上で見た(2)と(4)の例は、統語的に等位の2つの節が意味的に従属節と主節になる場合であったが、統語的な主節と従属節が意味的に逆転する場合もないわけではない。

(5) a. *She_i was told that Mary_i would have to
step on some people.

b. She_i was told that if she wanted to get
anywhere in this dog-eat-dog world,

Mary_i was going to have to stepping on
some people. (McCray 1980: 331)

(5b)では(5a)に比べthat以下の従属節が長く、情報量が多くなっている。また（従属節を除いた）主節の部分は she was told であり、伝達動詞(reporting verb)のtellを中心とした、短く、情報量のきわめて少ないものであること注意すべきである。

また、このように主節が軽い要素であれば、上で見た(4b)のように文強勢を置くことによって従属節を意味的に主節のようにすることもできる。

(6) She_i was told that the company needed
Mary_i. (McCray 1980:334)

さらに、普通は主節にしか現れないルート変形(Root Transformation)を従属節に用いた文でも逆行照応が可能である。

(7) She_i was told that under no circumstances
would Mary_i have to compromise herself.
(McCray 1980:334)

ルート変形を適用したその結果が（同一指示を別としても）容認可能な文であるということは主節と従属節が意味的に逆転していることを示すものと言える。

1.2 2つの節のつながり

以上の例は2つの節の意味の相対的な重さという点から説明される例であったが、今度は2つの節のつながりという点から見てみることにしよう。

(8) a. *He_i ran home, and Walter_i packed his

bags.

b. He_i ran home, and then Walter_i packed his bags as fast as he could.

(9) a. ?She_i's almost sixty-five, and Mary_i won't be hired by anyone.

b. She_i's almost sixty-five, and therefore Mary_i won't be hired by anyone.

(McCray 1980:336)

これら2つの例は、等位接続詞のあとに副詞が付くと逆行照応が可能になるという例である。McCray (1980)はこれを2つの節に"causal connection"ができるためだと説明している。しかしここでは等位接続詞andの働きに注意してみたい。andには時間的前後関係を含む場合と含まずに対照を表す場合とがある。次は *Collins Cobuild English Language Dictionary*からの例である。

(10) a. She finished her Coke and put the bottle down under the bench.

b. He opened the car door and got out. . . .

(11) a. I meant to buy some tea yesterday and I forgot. . . .

b. It can be difficult when you do not think something is important and someone else does.

(10)は時間的前後関係を含む場合の例で、等位接続されているのは動詞句VPであり、主語は共通である点に注意したい。これに対し、(11)は主として対照を表す場合で、等位接続されてい

るのは主語を含む節である。よって(8a)(9a)のように主語を含む節が等位接続されている場合、同時的で対照を表すものと解釈されやすいのではないかと考えられる。² そして(8b)(9b)のように、時や結果の副詞を加えた場合にのみ同時的・対照的という解釈がなくなり、同一人物とする解釈が成り立つのであろう。

さて、ここまで考えてくると、2つの節のつながりとして説明されてきた例も1.1で述べた意味的な従属節と主節の関係としてまとめることができそうである。(8b)のような時間的前後関係にせよ、(9b)のような推論の前後関係にせよ、これらの例も1番目の節から2番目の節への方向性を持っているのであり、2つの節が対等の関係にあるのではない。そして(8b)と(9b)それぞれにおける2つの節の相対的な意味の重さも考えあわせるならば、(8b)と(9b)においても従属節から主節への流れがあると言えよう。よってここまでのまとめとして、逆行照応が可能となるのは意味的な従属節から主節への流れがある場合であるとしたい。

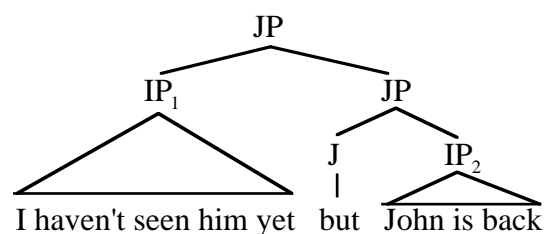
2. 句構造と制約

さて以上のような例はこれまで意味と統語構造のずれとして意味的観点から説明されてきた。しかしここでは句構造を用いてこの意味をとらえる方法を考えてみたい。

Chomsky (1995)でも取り上げられているように、句構造の理論は現在も進展が著しいが、ここではKayne(1994)のLinear Correspondence Axiom (線状一致の公理)に基づく句構造を仮定する。これに従って上で見た(2a)の例を表せば次のようにな

る。

(12)



ここでは等位接続詞をJとして表しているが、文全体がJを主要部とする投射JPとなっている。またKayneは指定辞も付加によるものとし、中間投射X'を認めないので(12)でもJを直接支配する節点はJではなくJPとしている。まずこの構造(12)を出発点として考えていくことにしよう。筆者は時崎(1995)で次の(13)に示すような例を説明するために(14)の同一指示に対する制約を提案した。

(13) a. * $[_{JP} [_{IP} He_i \text{ came in}] [_{JP} \text{ and } [_{JP} John_i \text{ was tired}]]]$. (cf. Larson 1990: 594)

b. *Penelope $[_{VP} [_{VP} \text{ cursed him}_i] [_{JP} \text{ and } [_{VP} \text{ slandered Peter}_i]]]$.

(cf. Langacker 1969: 162)

c. *John washes the dishes $[_{JP} [_{PP} \text{ in her}_i \text{ office}] [_{JP} \text{ and } [_{PP} \text{ in Mary}_i\text{'s house}]]]$.

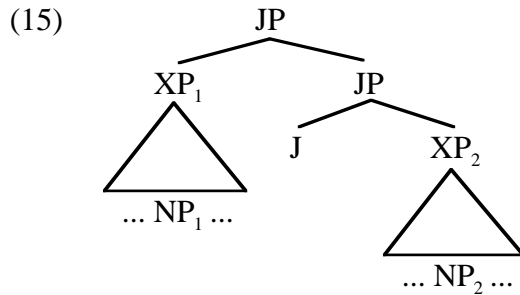
d. *John washes the dishes in $[_{JP} [_{NP} \text{ her}_i \text{ office}] [_{JP} \text{ and } [_{NP} \text{ Mary}_i\text{'s house}]]]$.

(14) (An XP containing) an R-expression cannot be c-commanded by (an XP containing) a coreferential phrase.

(14)は、R表現（を含むXP）が同一指示句（を含むXP）に

c-commandされてはならない、言い換えれば前者が後者より階層的に下位にあってはならないということを述べたものである。

³ そして(13)の各例の部分的な構造は一般化した形にしてみると(15)のように示すことができる。



(15)のXPは、(13a-d)ではそれぞれIP, VP, PP, NPである。(15)で示されるようにXP₁はXP₂をc-commandするので、XP₂に含まれるNP₂がR表現であればXP₁に含まれるNP₁と同一指示とは解釈されない。よって(13a-d)の事実は一般的な制約(14)によって説明できる。また、上で見た(1), (4a), (8a), (9a)の各例も(15)の構造をしており (XPはIP)、制約(14)の違反として説明できる。⁴

しかしながらこの制約は、(12)の構造では代名詞himを含むIP₁はR表現Johnを含むIP₂をc-commandするのでこの例は同一指示が不可と予測してしまう。

この問題を解決するために、もう一度これまでに見た例について考えてみよう。まず気がつくのは等位接続詞を従属接続詞によって置き換えても基本的な意味が変わらないということである。例えば神崎(1994)や中右(1994a, b)は次の各々のa文に対してb文のパラフレーズを示している。

(16) a. She was poor but she was honest.

b. Although she was poor, she was honest.

(中右 1994a: 38)

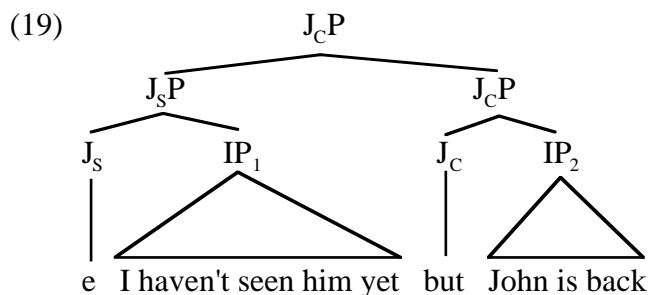
(17) a. He_i looks at me and John_i goes out of his
mind. (Bolinger 1979: 304)

b. If he_i looks at me, John_i goes out of his
mind. (神崎 1994: 179)

(18) a. Either he_i does what I say or John_i loses
his job. (Bolinger 1979: 304)

b. If he_i doesn't do what I say, John_i loses
his job. (中右 1994b: 362)

これらの例ではa文の左の節に従属接続詞をつけることでこの節がb文では従属節になっている。このことを句構造に表すために、左の節も音形のない空の従属接続詞 J_s に導かれていると仮定してみることにする。すなわち(2a)は(12)ではなく次の(19)の句構造をしていると仮定する。ここでは従属接続詞 J_s との区別のために等位接続詞は J_c として表す。



(19)ではhimを含む IP_1 はJohnを含む IP_2 をc-commandしない。⁵

よって同一指示解釈が可能になると正しく予測される。

空の接続詞を仮定することの妥当性については、次の音韻的な現象が1つの証拠になるかもしれない。Mittwoch(1983:134)は(2a)の文の最も自然な音調は次の(20)であると述べている。

(20) //4 I haven't seen him₁ yet //1 but John₁ is
back //

この表記法はHalliday (1970)によるもので、4は下降上昇調、1は下降調、二重の斜線は音調句の境界を表している。Halliday (1970)は2つの節の結びつき方によって4つの音調の組み合わせをあげている。

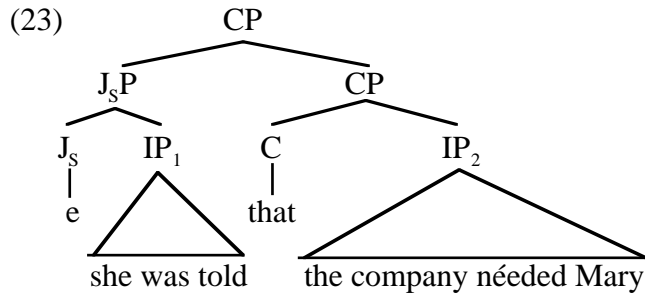
- (21) a. //1 John went / òut //1 Mary stayed at /
hòme // [unrelated]
- b. //3 John went / óut and //1 Mary stayed at
/ hòme // [co-ordinate]
- c. //4 _^ when / John went / òút //1 Mary
stayed at / hòme //
[dependent-independent]
- d. //1 Mary stayed at / hòme when //4 John
went / òút // [independent-dependent]
- (Halliday 1970: 10f., 30)

(20)の音調4&1は等位接続の(21b)ではなく従属節・主節の(21c)のものであり、(20)は次の(22)と等価であると言える。

(22) Although I haven't seen him₁ yet, John₁ is
back.

よってこの(22)のalthoughに当たる空の従位接続詞を(2a)に対して仮定した(19)の構造にも妥当性があると考えられる。

(2)のような等位構造の例と同様の方法で主節と従属節が意味的に逆転する例も表すことができる。例えば(6)の構造は次のようになる。



ここでも意味的に従属的なIP₁は空の従位接続詞の補部であると考えている。sheを含むIP₁はMaryを含むIP₂をc-commandしないので同一指示が可能という正しい予測になる。この(23)の構造もこの文を次の(24)と等価に考えていることになる。

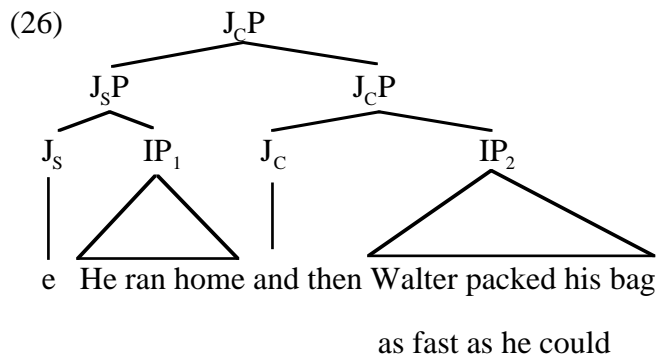
(24) As she was told, the company needed
Mary.

さらに、2つの節のつながりとして1.2で扱った(8b)(9b)の例もそれぞれ(25a)(25b)のようにパラフレーズできる。

- (25) a. After he_i ran home, Walter_i packed his
bags as fast as he could.
b. Since she_i's almost sixty-five, Mary_i won't
be hired by anyone.

よって例えば(8b)は上で示した(19)と同じ句構造で表せるだろう。

6



ここでも heを含むIP₁はWalterを含むIP₂をc-commandしないので(14)には違反しないため同一指示が可能という正しい予測が得られる。

以上この節では、意味的な理由で同一指示が可能になる場合を、空の従位接続詞を仮定した句構造と一般的な制約(14)によって説明できるということを述べた。

3. おわりに

小論は、英語の逆行照応について、これまでに論じられてきた例を再検討し、従来意味的にしか説明できないとされてきた例も句構造と一般的な制約によって構造的に説明できるということを論じた。

ここでの基本的な考え方は、他の名詞（典型的には代名詞）と同一指示である名詞句を、「話し手の意識の上でより重要でない位置」に、R表現という経済的でない形で表すことは言葉の経済性から見て不自然だということである。制約(14)はこのことを形式的に述べたものである。ただこの「意識の上でより重要でない位置」という概念を句構造で表現するためには、ここで述べたように音声的に空の接続詞を仮定する必要がある。(19)(23)(26)の句構造はこれを示したものであり、これらは純粋な統語構造というより、意味的・語用論的な構造であると言える。文法全体の枠組みの中でどのように位置づけることができるかについては稿を改めてさらに検討したい。

注

* 本稿は日本英文学会北海道支部第39回大会(1994年10月2日北海道大学)シンポジウム「英語の照応現象」における口頭発表の一部に基づいている。葛西清蔵先生、栗原豪彦先生、高橋英光先生、編集委員の方々をはじめ、貴重なご意見を下さった多くの方々に感謝を申し述べたい。またインフォーマントとして協力して下さったWilliam Green氏に御礼申し上げたい。

¹ 同一指示を指標_iで表す。指標がついた文では、文頭のアスタリスク(*)や疑問符(?)は同一指示解釈が不可能または困難であることを示す。またその判断については、出典が記してあるものはその判断を示し、出典が記されていないものはインフォーマント・チェックの結果を示している。

² 主語を繰り返した場合、同一指示と解釈されにくくなるのはできるだけ省略をおこなうという経済性の原理によるものと考えられる。時崎(1991)ではAvoid 'New' NPという語用論的原理でこのことを説明した。

³ R-expression (R表現)とはReferential expression (指示表現)の略であり、潜在的に指示的な主部 (John, wood, sincerity, book など)を持つ名詞句と変項 (variable)を含む。詳しくはChomsky (1981:102)を参照。ここでは先行詞のJohnなどを指す。

また、ここでc-commandは次のKayne (1994)の定義に従っている。

- (i) X c-commands Y iff
 - a. X and Y are categories
 - b. X excludes Y (= no segment of X)

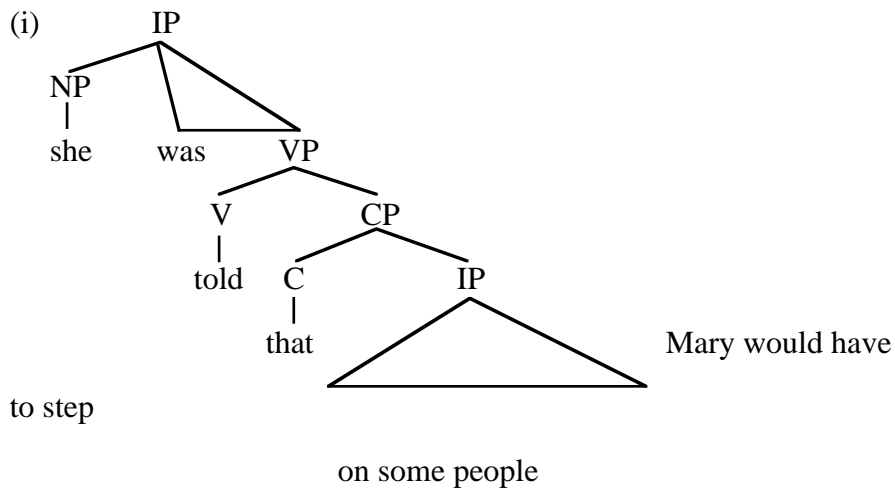
dominates Y)

c. every category that dominates X

dominates Y (Kayne 1994: 16)

なお、制約(14)は相対化されたcommand (relativised command) とも言うべきものであるが、ここでは詳しく論じる余裕がない。時崎(1995)を参照されたい。

⁴ (5a)は概略次の構造をしている。



(i)では同一指示句sheによってR表現のMaryがc-commandされているので、(14)の制約に違反する。よって(5a)も制約(14)によって説明できる。この場合は(14)の括弧部分を省いた形の制約が働いていることになる。これは従来の束縛理論のC(Binding Theory C)に該当する。これについてはChomsky (1981:188)を参照。

⁵ (19)ではhimを含む J_sP はJohnを含む J_cP をc-commandするが、 J_s と J_c は同じ範疇ではなく、(14)のXPには該当しないと考える。

⁶ 副詞thenの統語的な位置についてはここでは考慮せず、(26)の図にも示していないが、意味的にはandと結びついて接続詞

的な働きをしていると考えられる。

また、(19)と(26)では、顕在的な接続詞はそれぞれbutとand (then)であり、異なっている。しかし、これら2つの文では、(22)と(25a)のパラフレーズに示されるように、意味的に1番目の節が2番目の節に対して従属的になっている点は同じであるため、文全体の構造は同じとなる。

参考文献

Bolinger, Dwight. 1979. "Pronouns in discourse,"
in Talmy Givón (ed.) *Syntax and Semantics*,
vol. 12: Discourse and Syntax, Academic
Press, 289-309.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government
and Binding*, Dordrecht: Foris.

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist
Program.*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Erteschik Shir, Nomi. 1973. *On the Nature of
Island Constraints*, Doctoral dissertaion,
MIT, reproduced by Indiana University
Linguistics Club, 1977.

Halliday, M. A. K. 1970. *A Course in Spoken
English: Intonation*, Oxford University
Press.

神崎 高明. 1994. 『日英語代名詞の研究』研

究社.

Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.

Langacker, Ronald W. 1969. "On Pronominalization and the Chain of Command," in D. A. Reibel and S. A. Schane (eds.) *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 160-186.

Larson, Richard. K. 1990. "Double objects revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.

McCray, Alexa T. 1980. "The Semantics of Backward Anaphora," *NELS X'*, 329-343.

Mittwoch, Anita. 1983. "Backward anaphora and discourse structure," *Journal of Pragmatics* 7:2, 129-139.

中右実. 1994a. 『認知意味論の原理』大修館書店.

中右実. 1994b. 「新刊書架—神崎高明著『日英語代名詞の研究』」『英語青年』140: 7 (10月号), 361-362.

Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and Semantic Interpretation*. London: Croom Helm.

- 時崎 久夫. 1991. 「同一指示解釈の語用論的原理」 『北海道大学文学部紀要』 第39巻
第3号, 73-90.
- 時崎 久夫. 1995. 「定名詞句照応と線的順序」
『文化と言語』（札幌大学外国語学部紀
要）第28巻第2号, 1-21.